

< 講演録 >

京都大学未来創成学国際研究ユニットセミナー（第2回）
「生と死、有と無」

日 時 : 2016年5月10日（火）17:40～18:20

会 場 : 京都大学基礎物理学研究所・湯川記念館 1階 パナソニック国際交流ホール

司 会 : 吉村一良氏（京都大学理学研究科教授）

講 師 : ツトム・ヤマシタ氏（音楽家）

テ ー マ : 「懐かしき未来－石・人・音・空に住む」

“Stones, Mankind and Sound are all in 0 (zero).”

村瀬氏：時間も押していますので、司会を吉村先生にバトンタッチしまして、ヤマシタ先生のご講演に移りたいと思います。

吉村氏（司会）：それではヤマシタ先生のご講演です。司会を担当させていただきます、理学部理学研究科の吉村です。よろしくお願ひします。私は村瀬先生の友達です。村瀬先生のセミナー、ゼミに参加していらっしゃる学生さんもたくさんいらっしゃると思います。

まず、最初にツトム・ヤマシタさんの紹介をさせていただきたいと思います。ツトムさんは僕にとっては、本当に若い頃からのヒーローです。ツトムさんは、小さい時からお父様の影響を受けられて、5歳とか、非常に小さな頃から音楽にのめり込んで。京都でお生まれになり活躍されているわけです。若くして打楽器に目覚められた。アメリカに留学されて、それからジュリアード音楽院を卒業され、結局、パーカッションのクラシックの分野で若くしてマエストロというか、地位を確立されたような方でありまして、ベルリンフィルですとか、フィラデルフィア交響楽団、それからシカゴフィル、そういうところで大活躍された方でありまして、先ほどカール・ベッカーさんのスライドの中にも TIME の表紙がありましたけれども、TIME 誌に発表された記事では、打楽器、パーカッションのイメージというか、そういうものを一新した方ということで世界的に有名な方です。ただ、私が知っているツトムさんというのは、その頃のツトムさんではないのです。ツトムさんはクラシックを極められたのですけれども、それに飽き足らず、ジャズの世界、ロックの世界に飛び込んで行かれるのです。その頃のツトムさんを僕は知

っている。みなさんと同じ頃、京大に入った頃に一生懸命聴いていた、本当に熱中して聴いていたのはツトムさんが作られた「GO」というスーパーバンドがあるのですが、そのスーパーバンドをずっと聞いていました。本当に寝ても覚めてもずっと聴いていまして、このスーパーバンドはツトムさんが世界中の素晴らしい音楽家、ロックミュージシャン、ジャズミュージシャン、そういう人に呼びかけて参加していただいて、それでできた「GO」というバンドです。ですから例えば皆さんがよく知っているスティーヴ・ウィンウッドだとかマイケル・シュリーブとか、それからクラウド・シュルツェだとかアル・ディ・メオラとかそういう今でも大活躍している音楽家がいっぱい参加していました。それを僕はいつも聴いていて、だから僕の中ではツトムさんはヒーローなのです。そういう方に、ここ5、6年前にさかのぼりますか、その頃に知り合いになります。これは今ここにいらっしゃる八木先生、それから村瀬先生を通して、偶然というか、知り合いになりました。自分の中でスーパーヒーローだと思っていた人に最近出会えて、奥様のミオさん、今日来ていらっしゃいますけれど、スタジオに呼んでいただいたり、いろいろお話していただいて非常にワクワクとした、そういう生活を送らせていただいています。つい先だっては、山極先生とご一緒しまして、ツトムさんのところでいろいろとプロジェクトディスカッションをしたりですとか、ワクワクとしたような、何と言いますか新鮮な過去そして懐かしい未来。この『懐かしい未来』というのはツトムさんのニューアルバムのタイトルなのですが、そういうツトムさんです。では、マイ・ヒーロー、ツトムさんを紹介します。ツトムさん、よろしく。

ヤマシタ氏：ありがとうございます。ヤマシタです。先ほどからベッカーさんの話を聞いていて、ほとんどベッカーさんが述べられていることに尽きると思います。あえて私から述べたいことは、私が西洋の音楽活動をやめて日本に帰って来た経緯でもあるのですが、それは西洋の芸術の方向性と精神性に可能性を感じなくなったことで、東洋の文化性の素晴らしさに気づかされたことです。

西洋音楽の世界においては、特にルネッサンス以降、バロック時代から始まった音楽様式がその後、ロマン派時代に移り、新旧のロマンチズムの表現形式を経て、20世紀に至っています。プレモダン、ポストモダン、前衛、コンテンポラリー、そしてフュージョン。これら様々な様式と形式は、一体何を意図しどのような意味を持って来たのか。そして我々が住む「21世紀の今」日常生活の中で聴く音楽はいったい何をイメージし、創られているのか。果たして、私達の人生を音楽でもって豊かなるものに出発しているのか。現在この地球上には溢れる程の多種多様な音楽・音（シグナル等）を含めた音の情報が飛び交っています。そうした中で我々は、音との対話をしっかりとできているのでしょうか。

1970年代後半、欧米でプロの音楽家として活動しキャリアの絶頂期を迎えた頃、私の

中において『音楽とは』……。そのような大きな疑問が生まれ、一気に爆発しました。その結果取った行動が、音楽活動を辞めるということでした。辞めるからには完全に辞めるということで、日本に、そして京都に帰って来たのです。当時、幸いにも私の父が、東寺の洛南高校で教鞭を取っていましたから、そういうご縁もありまして、東寺の中で3年間、修行僧と一緒に生活をさせていただいたのです。その時に感じたことは、「何て幸せなんだろう。毎日掃除と作務だけで十分満足できる。余ったあとの時間で自分の好きな瞑想と修学も出来る。何も物を創り出す必要性はないし、こんな幸せなことってあるだろうか」と。その3年後に、心の中に湧き出した思いから決心を固めたのです。「あ、これや！坊さんになろう。こんな良い仕事はない」と。そして御老師に「お願いします。私は準備が整いました。出家したいのです」と申し出ました。「何を言うとするんじや。せっかく3年間修養したんや。ここに居たらあかん。出て行きなさい」という答えでした。「なんでなんや」と、その時は大変ショックでした。自分がやっていることは、他の坊さんと比べても別に劣っているわけでないし、掃除も一生懸命した。その時、御老師はこうも言われました。

「坊主は、努力すれば誰でもなれる。しかし、芸術をやることは誰でもできひんのや。それをあんたはやって来たんだからもう一度やり直しなさい。今度はここでの経験を活かした芸術をやりなさい」

東寺は弘法大師が開かれたお寺です。お大師さんの教えにもありますが、最後に次のような饞別の言葉をいただきました。

「ハスの花は泥沼の中で咲く。それを見て人間が幸せになるんや。芸術というものはそういうものと違うんか。それをしっかり心に刻んでおきなさい」

不思議なことにそのお寺を出て間もなく、この石、サヌカイトとの出会いが起きたのです。弘法大師の出身地、四国の香川県の坂出の金山という所から出土した石です。

約1350万年前、日本中央分岐帯で起こった大噴火、そして大地震からできた瀬戸内海。その時に噴出したマグマが何らかの奇跡的な現象の力でもって、このサヌカイトというものになっていったと言われています。サヌカイトは学名です。古事記の中と日本書紀の中にちらっと出てきています。古代では「サヌカイト」とは呼ばれていません。

「カンカン石」（おそらく四国地方での方言）と呼ばれていたようです。サヌカイトは約2万年前、石器時代においては、日本人が生活の中で、鏃（矢じり）、ナイフ等生活用具として主役を担っていた石なのです。安山岩という種類の石ですが、ちょっと特殊な安山岩で、ドイツの地質学者のナウマン博士が明治時代に来日された時に発見採掘されてドイツに持ち帰られ、その後バインシェンク博士によってドイツ語で「サヌカイト」と命名され学会に発表されました。

東寺を出た後、すぐに出会ったこの石との因果関係はわかりません。しかし当時、この石を何とか楽器にしたいという故 前田 仁さんとの出会いがあり、二人三脚で約 30 年をかけてサヌカイトを楽器として仕立てあげる夢を追い、現在に至っています。

ベッカーさんのさっきの話に少し戻りたいのですが、私が幼い時、約 3 歳から 4 歳の時に父から音楽の手ほどきを受けました。はじめは西洋音楽です。そして約 14 年後、日本の芸術大学に行くか、それともアメリカかヨーロッパに行くかと……。私の場合はなぜかわかりませんが、アメリカのジャズが好きだったことも手伝って、アメリカ留学を決めました。もしもはじめにヨーロッパに行っていたならば、自分の運命が変わっていたと思います。アメリカでよかったと。その話はここでは差し控えますが、約 20 数年間アメリカ・ヨーロッパで西洋音楽の旅から学んだこと、それは、音楽はいつの時代においても、人間の生活様式を飾り、時代の先端を走っているということです。

物理的に説明すると、「音（波動）」、この空間においても充満していますが、聞こえていない「音（波動）」が我々の周辺にはいっぱいあります。サヌカイトは、我々が見ることができない空気の波動をつぶさに受け止めています。私の役目というのは、石との対話を皆さんに届ける、何かちょっと預言者的なところがありますが、それは宇宙から送られてくる何かを受け止めて、それを何らかの形で私の身体を通して音源化していくという作業を絶えずやっているわけです。これはトレーニングを重ねできている部分もありますが、果たしてその能力、つまり私の感性というものが自分一代の中ででき上がったものなのか？ それとも、もっとはるか彼方から何者からか受け取った極意なのかはわかりません。人間という本当に不思議なる存在が希求する生命の旅、その目的は人其々の無意識の中にあると思います。ありがたいことに、東寺にいた時に弘法大師が記された『十住心論』という書籍に出会ったことで、命の存在、その謎の部分がひも解かれて行く様でした。それは、「音と言葉」、そして「知と心」それを以て「真言」という、音と人間との関わりが論じられた書物です。「音楽（音）」は、現代社会では通信と娯楽的利用目的が強くなりすぎてしまった感があります。それがまたおもしろい展開に繋がってきています。例えばちょっと質問しますけれども音楽っていったい何だと思いませんか、あなた。

会場・京大学生：そうですね。自己表現ですか。

ヤマシタ氏：ありがとうございます。確かに自己表現なのですが、そうすると『自己』って何ですか？

会場・京大学生：自己。ごめんなさい。ちょっとわかりません。

ヤマシタ氏：すばらしい。その通りです。私もわかりません。私があなたと同じ 20 代だった 1960 年代においては、世界の若者はロックミュージックを用いて、自己表現にこ

だわりました。当時私はプロの音楽家として持ちうる全パワーを使い、各ジャンルの音楽様式を用いて自己表現にこだわり、全ての感情を音楽にぶつけました。特に 60 年代は世界中がベトナム戦争の真さなかで、人間が企てた大きな災いのもとで生活を営んでいました。ここで重要なポイントは、さきほどの音の疑問に戻りますが、「音楽」ということを全般的に考えた時、音楽もやはり時代・歴史などを通して大きな変容を繰り返して繋がっています。今、一般的にいう「音楽」は、日本では明治以降に初めて使われた言葉、概念です。それ以前においては、日本では「音楽」とは言っていないのです。例えば、ロックミュージックと言いますでしょうか？ロックを想像したうえで使いますでしょうか。ポップス、ラップだとか。その音楽表現をイメージしながらその言葉を使っていると思うのですが、日本の明治以前において、果たしてどういう思い、考え、そして言い方をしていたか、興味を持っていただければ大変面白いことに出会うと思います。要は、音楽の原点とは、『波動と波長』でもって成る自然現象です。

紀元前 239 年に完成した十二紀『呂氏春秋』（自然科学史）では、音楽の創造は、宇宙と自分とを根源的に一つにするという思想のもとにあったようです。紀元前五世紀には、孔子は「礼」は天地陰陽の秩序を整え、「楽」は調和をはかるものである。この様にして音（礼）楽（調和）として位置づけられています。古代ギリシャでも、ミューズの中に、詩歌、学問、とともに「音楽」があり、それを司るものには高い精神性が要求されたそうです。いづれにしても、音楽は、人間の心を表現するものとして人類の進化や文化と共に発展してきました。全ての要因は、刻の記憶の中に秘められています。

日本においても約 2 万年前、古代、石器時代においては、サヌカイトがカンカンと音を発することで、人々の心の交流を促していたことでしょうか。日本流の礼楽が行われていたはずですが。そして又、鏃だとかナイフだとかいろいろな日常道具として利用されていました。まさに万能の力、「やすらぎ」と「エネルギー」を担保する役目をこの石が合わせ持っていました。

音楽と人間との関係性は如何にして成り立っているのか……。その本質は、いかに音を聴く（聞く）か、その行為と意識に基づいています。「聴く（聞く）」という行為は、単純にヒアリング（無意識に聞く）とリスニング（集中して聴く）ということで大きな違いを創りだします。私としては、みなさんがその辺をどう理解されているかという点に興味があります。私にとって「聴く」行為は、英語で言うと「listen」ということに近く、それはある種の in tune（五感の調整）を意味します。自分の中で意識が tuning されていないと、音の現象の裏にある幻相（illusion）の世界と想像的精神界との対話が不可能になるからです。それは特に、先ほどベッカー先生も言っておられたことですが、

我々東洋人、日本人が長年の中で培った、**spiritual, ability**、霊性が心の中に宿る、そして靈魂を聴くということなのです。沈黙を聴くことで「間」を感じ取っているのです。我々が「空間」だとか、「人間」だとか、「間合い」だとか、多くの物事の要因を語る時、「間」を使いますよね。音楽芸術を探究する者にとって、最大のテーマは「間」の推察と感知なのです。美しい沈黙を聴く。それは、見えない、聞こえない、無限の世界と繋がった奇跡の世界そのものを自分の中に観て感じる。これが我々東洋人、そして特に日本において重んじられた精神文化の特異性だと思います。

先ほどベッカー先生の言われた、あの世とこの世を繋ぐその代表的な芸術形式として『能楽』があります。能楽は、あの世とこの世を繋ぐ様式。つまり、「間」を繋ぐということなのです。この「間」を皆さんはどのように認識され、そして理解されていますか。我々が今、この生きている瞬間も、無限の宇宙の時間の中の一瞬、間の中なのです。自分の五感、そして第六感へと繋がって行かなければ、自分と先祖との関係も繋がらない。それは過去と現在とが繋がっていないことを意味します。極端な話、未来もないということですね。私の場合は音楽芸術というものを通して「間」をいつも探求しています。私にとってそれは、真善美との出会いのようなものなのです。今日のテーマである「有と無」を語るにあたって、その「間」がつかめないと「有と無」両方の世界を感じ、そして認識することには至りません。そこで私からの提案として、皆さんに信じて欲しいことは、皆さんの各自が持つておられる特異なる心と感覚、その世界を研ぎ澄ませて頂きたいのです。特に日本人の場合、恐らく体験されていると思うのですが、生まれてきて今日に至るまでに、「礼」「楽」「信」「儀」を生活の営みの中で培われてこられたと思います。そしてその全てを結実した形、それが『祭り』の本来の意味です。日本の場合は、全国各地域にまだ残っていますが、祭事（神事）を通して、自分が如何なるポジションに立って生きているかということ、相対的に認識出来れば面白いことにコンタクトすることができます。祭りの目的とは、自分の中にある「霊性」というものを発動させることにあると思います。私もこういうことを日々認識して、そして自分の感性をどのようにして磨くか、それは無限なる奇跡の世界と自分が繋がっている・・・。このことを信じて日々の生活を送っています。

では皆さんと共に、サヌカイトを用いて「沈黙の間」を聞いてみましょう。

【石の音色】（00:32:25～00:34:32）

特に今私が今使った石ですけれど、恐らく今聞いていただいた周波数、だいたい高いところは数万ヘルツが出ています。他の楽器では出すことの出来ない、非可聴の高音域が出ています。何か自分の中でつきささるような感覚だとか、スッと染みていく感覚と

か、人によって違うと思いますが、そういうことが一つの「間」なのです。「間」というものは、おもしろいことに言葉では表現しづらい。だからこそ、人間は創造という行為を行ったと思います。その創造というものは、「幻相」と「現実」というものが一つの線上に繋がった時、何かおもしろいものがそこに起こる。それが私の中での美なのです。

最後になりますが、年に一度 京都 大徳寺で、音と祈りにより人と自然の調和を五感の全てで体感していただき、世界平和を願う「音禅法要」というものを行っています。その中で唱えられる般若心経は「有と無」、これをテーマにした経典です。それを若いお坊さんに古典の漢文ではなく、現代語でやってみたらどうかと提案しました。その結果 生まれた般若心経のフィルムドキュメントを、皆さんにご覧いただきながら終わりたいと思います。有難うございました。

【法要】

見てごらん

感じてごらん

自分自身を

この世の全てを

変わらないもの、永遠なものなど何処にもありはしない

さあ、悲しみと苦しみとさみしさを

不安と憎しみと怒りを乗り越えて行こう

観音様は語られました

あなたの生きている生身の身体は空と異ならず、

空はあなたの生きている身体のことなのです

血も肉も骨も、すなわち空は、

空はすなわち、あなたの姿そのもの

皆さん、この世の全ては、宇宙の全ては空の姿なのです

生まれない、見えない、汚れない、清らかでもない、足りないこともない、不足することもない、満たされることもない

それだけではありません

それだけではありません

形のない、あなたの感覚もイメージも意思も考えることもまた空そのもの

だから空に形はありません

見えない、聞こえない、匂えない、味わえない、触れない、心もない

色もない、音もない、香りもない、味もない、触れるものもない、存在するものもない

意識の世界から目の世界に至るまでことごとくない、ない、ない、ない

迷いのない、迷いがつきることもない、年老いて死んでいく者もない
 老いと死がつきることもない
 苦しきもない
 苦しきの疑問もない
 苦しきから逃れることもない
 苦しきから逃れる道もない
 悟りもない
 悟って得ることもない
 得るといふことがないならば菩薩にならんとする修行者たちよ
 空、真実を告げ、般若波羅蜜多を生きていけ
 ありのまま
 本来無一物
 心を覆ってくらすものがない
 心に恐れがない
 いっさいの文字や言葉を遠く離れた
 きわめて静かなる落ち着いた気持ち
 前世、今生、来世
 全ての仏は真実を告げる
 般若波羅蜜多により
 正しい悟り
 阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみやくさんぼだい）へ降りたる者
 共に祈ろう
 前へ進んで行くしかないんだ
 いっしょに生きて行くんだ
 ゆえに知るべし
 般若波羅蜜多は大いなる呪文
 明かされたる大いなる呪文
 無上の呪文
 比類なき呪文
 いっさいの苦しきを除き
 真実をしてそうならざるが故に
 般若波羅蜜多の呪を説く
 すなわち呪を説いて曰く
 開け

開け

ハーラー ギャーテー (波羅羯諦)

前へ、前へ、前へ超えて行け

ハラソー ギャーテー (波羅僧羯諦)

ボージー (菩薩)

ソワカ(薩婆訶)

ハンニャ シンギョー (般若心経)

吉村氏：ツトムさんが今、音禅法要のフィルム、音楽をご披露されましたけれども、今年の音禅法要、これは毎年ツトムさんのライフワーク的にやっているのですが、大徳寺の法堂で6月4日の土曜日です。ツトムさんが、特に若い京大の学生さん達をご招待したいということで、もし参加したい、生で聞きたい、生で体験されたいという人は、僕が窓口になっていきますけれども、村瀬先生でもかまいませんので、ぜひ申し出てください。よろしくお願いいたします。

以上